

「バースデイ」

—初稿—

2025/11/4

米儀

人物表

ノア 小林 小林 原田 小林
太一 勝 恵理 聰美

(28) (13) (43) (41) (40)

会社員
聰美の同僚
聰美の夫
聰美の息子・中学生
新興宗教リーダー

1. スーパー・店内（夜）

大型スーパーの店内。客はまばう。
お弁当コーナー。小林聰美（40）が弁当を手にと
り、見つめている。

弁当には、30%オフの上に50%オフの値下げシ
ールが貼られている。

聰美、弁当を戻し、スマホを確認する。

（スマホ画面）聰美が送信したメッセージ。「今日
遅くなるからお弁当でもいい？」 未読の状態。

スマホを操作する手元。「通話」ボタンを押そうと
するが、数秒指を止め、押すのをやめる。

聰美、自分を落ち着かせるように、大きく呼吸する。
あきらめた様子で、スマホをしまう。
食材コーナーへ進み、勢いよくかごに入れる。

2. 小林家・玄関（夜）

中古マンション。真っ暗な玄関。

聰美、電気をつける。散らかった靴。

聰美 「ただいまー。遅くなつて、ごめんね。すぐ作るから」
返事はない。

聰美、廊下に脱ぎ捨てられた服を拾いながら進む。

3. 小林家・リビング（夜）

真っ暗なリビング。

聰美、リビングのドアを開け、驚いた様子で、
聰美 「えつ、いないの？」

その瞬間、クラッカーの音と共に電気がつく。
クラッカーを持った小林勝（43）、小林太一（1
3）が満面の笑みで、

二人の声 「ハッピーバースデイ」

聰美、ハッとして、

聰美 「あつ、そうだった」

勝 「ほうな。言つただろ？」

太一 「本當だ。なんで、忘れんだよー」

勝と太一、おかしそうに笑う。

「ほら、一いつち」

と、手を引く。持つていた物（カバン・服・スープの袋）を奪い、雑に放る。袋からは鈍い音。聰美、それらを横目で見るが、何も言わず笑みを作る。

勝 「はい、40歳記念」

と、ろうそくのついたケーキを差し出す。

聰美 「記念……なのかな」

と、苦笑いで、ろうそくを吹き消す。

勝・太一 「おめでとう」

太一 、「得意げに、

太一 「今日は、俺たちの力作」

テーブルには不格好な料理が並んでいる。

聰美 「ありがとうございます。すういね」

と、力なく笑う。

太一 「見た目は良くないけど、美味しいから」

勝 「太一、意外とセンスあつたよな」

聰美 「そうなんだ。いただきます」

勝・太一 、ひと口食べる聰美を見つめる。

聰美 「うん、美味しい」

と、笑顔を向ける。

太一 「やつた、それ俺が作ったやつ」

勝 「俺のサポートのおかげでしょ」

太一 「いやいや、全然ひとりでいけたし」

楽しそうに笑う一人。

聰美、二人を見つめながら、ゆっくりと箸を置く。床に置かれたままのスーパーの袋。

× × ×

聰美、テーブルの上のお皿をまとめ、台所へ運ぶ。ひどく散らかった台所が目に入る。

数秒固まる聰美。

目を閉じ、大きく呼吸する。

ゆっくりとシンクにお皿を置き、台所からリビング

の様子を見る。

散らかった部屋。太一はテレビゲームをし、勝はソファーに横になり、スマホをいじっている。聰美、スポンジを水に濡らし、握りつぶす。

4. 会社・室内（昼）

お昼休みの時間。ランチに向かう人々。

聰美、動く気力がない様子で、自分の席に座つたまま、ボーッとしている。

原田恵理（4-1）が近付き、明るく声をかける。

恵理 「ランチ行く？」

聰美、頷いて、ゆっくりと立ち上がる。

5. 会社・食堂（昼）

ほぼ満席の食堂。がやがやとしている。

恵理 「それで？ 聰美が片付けたの？」

聰美、頷く。

恵理 「優し過ぎでしょ」

聰美 「そう……だよね」

恵理 「片付けまでが料理でしょ」

聰美 「んー。それを言うのすら面倒で……」

恵理 「そつか。自分でやつた方が早いしね」

聰美 「それに嫌々やられても……」

恵理 「分かる。雑だから、結局やり直しだし」

聰美、頷いて、

聰美 「本当(?)」

と、笑顔になる。が、すぐに無表情になつて、

聰美 「……毎日、時間だけが過ぎてく」

恵理、黙つて聞いている。

聰美、手元の紙ナプキンを何度も折りたたむ。

ハツとして、

聰美 「(?)めん。暗くなつちゃつた」

と、力なく笑う。

聰美 「恵理はいつも元氣で羨ましい」

恵理 「(かぶせるように) ね、今日、仕事のあと空いてる?」

聰美 「驚いて、

「急にどうしたの?」

聰美 「私の元気の源」

と、得意げにライブ映像を見せる。客席の熱狂。

聰美 「いいな。楽しそう」

聰美 「救われるよ。現実なんてどうでも良くなる」

聰美 「そうなれたらいいんだけどね」

と、手元に視線を落とす。

恵理 「聰美?」

聰美、すぐに取り繕つて、

「あ、『めん。今日は……無理かな』

恵理 「夕食? 一口ぐらしサボつちやえば?」

聰美 「行つたら、そのまま帰りたくなくなつちやいそつ

と、困つたような表情で笑う。

恵理 「まあ、気が向いたら来て。誕生日プレゼント」「

と、聰美に少し強引にチケットを渡す。

聰美 「行けないよ」

恵理 「気にしないで。その時はまた誘うから」

聰美、チケットを見つめる。周囲の喧騒が遠のく。

6. 会社・出入口（タ）

小雨が降っている。

傘を広げる人、駅へ走り出す人がいる中、聰美だけが、立ち止まり空を見上げている。

鞄から傘を取り出^{そう}として、光るスマホに気付く。(スマホ画面) 勝からのメッセージ。「太一、今日は友達の家に泊まるつて。俺も遅くなる」

一瞬、息を呑む聰美。

すぐに恵理に電話をかける。

高揚した声で、

「今ど? 今日、行ける」

聰美

7. ホール・室内（夜）

ホール・室内 (夜)

座席には紫の布が掛けられており、所々白い布が混ざっている。ステージ中央には白い幕、天井からは金の布が垂れている。

薄暗い照明の中、観客たちがそぞろと席に着く。恵理、慣れた足取りで進む。その後ろを駆ける鳴りづいていく聰美。

恵理前から二列目中央寄りの席に腰をおろす。聰美、座席に白い布が掛けられているのを見て、

「え、私、」「?」「聴美はゲストだから」

聰美 「ゲスト？」
「初めての人は、みんな白なんだよね」

聰美、思わず会場を見渡す。

恵理、ペンライトと光るフレンズレットを渡して、

「はい、楽しんで」

と、聰美がブレスレットを付ける。その瞬間、会場

が暗くなり、歓声とペンライトの光の波が広がる。手拍子が始まり、白い幕が紫の光で染まる。

爆音と共に幕が上がり、ノア（28）が姿を現す。紫の光で照らされるノア。歓声が一段と大きくなる。

聰美、目を見開き、ノアを見つめる。

聰美、促されたようにペンライトを振り始める。手を振るリズムに少しずつ体が乗っていく。

周囲の観客と一緒になる。

小林家・玄関前（夜）

聰美、スマホを確認。

(スマホ画面) ファン用「ミニユーティ通知」が次々届く。「ご購入ありがとうございます」「ポイント獲

得。ランクが上がりました」「ノアから祝福のメッセージが届いています」

聰美、画面を見つめ、にやけた。

無意識に「ブレスレット」触れる。

酔っ払いが歌う『Happy birthday to you』が聞こえてくる。

聰美、勢いよくドアを開ける。

9. 小林家・玄関（夜）

散らかった玄関。

靴下が脱ぎ捨ててある。

聰美、それを思いきり蹴とばす。

笑顔の聰美。

（おわづ）